

加守田章二

《曲線彫文壺》



加守田章二(1933-1983)
《曲線彫文壺》

1970年
陶器
高さ 25.2, 幅 23.0, 奥行 24.8cm
平成24年度購入

一

九六〇年代中頃から人気作家として注目されるようになった加守田章二(一九三三―一九八三)は、むしろ世俗のわずらわしさから逃れようとするかのように、一九六九年六月、妻子を栃木県益子に残したまま制作拠点を岩手県遠野に移し、まるで修行僧のように作陶に没頭する生活を送るようになります。しかもその場所は、市街地から四キロメートルほど離れた辺鄙な場所でした。

加守田章二が生前好んで口にしていたのが「北風に向かって歩く」という言葉だったそうです。「淋しさ」「空しさ」「退屈さ」――普通の人であれば避けたいと思うこうした感覚をむしろ堂々と全身で受け止めること、そこに人間の生きる意欲の原動力があると考え、それを身をもって実践した男でした。

その頃の雑記帳には、「着実な単純な生活の積み重ねこそ最も充実した生活である」(一九六九・七・二十二)と記されており、遠野に自分の理想の仕事場を得て、そこで作陶三昧の充実した日々を送っていたことをうかがわれます。

遠野に拠点を移した年の秋から冬にかけて制作したのが「曲線彫文」シリーズで、遠野に制作拠点を移してはじめての個展(一九七〇年三月、日本橋高島屋)で発表されました。《曲線彫文壺》はその時に出品されたおよそ三十点の「曲線彫文」のうち

のひとつです。

ゆるやかにうねるような凹凸を備えた多面体の表面全体に、波のような曲線を彫った「曲線彫文」はプリミティブな生命感を備えています。一見すると、縄文土器を連想させるかもしれませんが、この作品の着想のもとになったのは、じつは遠野にある神社の朽ちかけた木製の鳥居だったそうです。長年にわたって風雪にさらされ、表面がささくれてごつごつした状態となった鳥居に共感するものがあつたのでしょう。

《曲線彫文壺》の多面体のような器形が生み出す影、そして、波状に彫られた曲線文による影が存在感をきわめたさせています。

「曲線彫文」は発表と同時に絶賛されました。おそらく、そこに安住することでもきたに違いありません。しかし、加守田はその次の個展ではまったく違う作風の作品を発表しました。いかに高く評価されようとも、自己模倣することなく、つねに「跳きながら努力すること」を自らに課していたのです。その後、個展ごとに作風を変えていく加守田章二に人々は熱狂しました。

加守田章二は陶芸界の寵児と絶賛され、期待を一身に集めました。その後病に倒れ、四十九歳の若さでこの世を去りました。(工芸課主任研究員 木田拓也)